

特集

動く。
動かす。
考える。

連載 贈る言葉

上山 信一
小澤 太郎
富田 勝



KEIO SFC REVIEW

TABLE OF CONTENTS

No. **74**

特集

02 動く。動かす。考える。

04 教員対談 SFCスピリッツと体育

加藤 貴昭（環境情報学部教授）

東海林 祐子（政策・メディア研究科准教授）

08 教員座談会 「経験の学」

“生きる”という実践の術を学問にしたい

諏訪 正樹（環境情報学部教授）

加藤 文俊（環境情報学部教授 / 政策・メディア研究科委員長）

石川 初（環境情報学部教授）

12 動くことと考えること。そして、それらをつなぐもの

12 学生インタビュー 01

ランナーたちの座談会

田島 公太郎（環境情報学部2年）

尾崎 里紗（環境情報学部1年）

田辺 勇希（環境情報学部1年）

16 学生インタビュー 02

体感から得られる学び

尾寺 美音（政策・メディア研究科修士課程1年）

20 学生インタビュー 03

看護とSFCと女優修行

瀬尾 みなこ（看護医療学部4年）

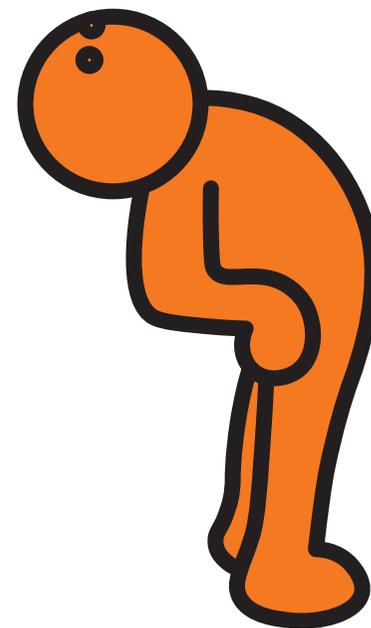
連載

24 贈る言葉

No.07 上山 信一 / No.08 小澤 太郎 / No.09 富田 勝

28 ORF 取材記

32 編集後記



寒い冬が終わると、春が来る。
停滞していた時期を脱して、
世界は動き出している。
私たちはどうだろう。
移ろう時代を、変化していく自分を、
軽やかに乗りこなすために。
じっと縮こまっているより、
立ち上がって、まずは体をほぐして。
考えるために、動いてみよう。

04 教員対談 SFCスピリッツと体育
加藤 貴昭 (環境情報学部教授)
東海林 祐子 (政策・メディア研究科准教授)

08 教員座談会 「経験の学」
“生きる”という実践の術を学問にしたい
諏訪 正樹 (環境情報学部教授)
加藤 文俊 (環境情報学部教授 / 政策・メディア研究科委員長)
石川 初 (環境情報学部教授)

12 動くことと考えること。そして、それらをつなぐもの

12 学生インタビュー 01
ランナーたちの座談会
田島 公太郎 (環境情報学部 2年)
尾崎 里紗 (環境情報学部 1年)
田辺 勇希 (環境情報学部 1年)

16 学生インタビュー 02
体感から得られる学び
尾寺 美音 (政策・メディア研究科修士課程 1年)

20 学生インタビュー 03
看護とSFCと女優修行
瀬尾 みなこ (看護医療学部 4年)

教員対談 SFCスピリッツと 体育

SFCの学生にとって数少ない必修科目の一つである体育。普段何気なく履修している授業や当たり前のように使っている体育システムにも、脈々と受け継がれてきた歴史とSFCスピリッツがある。SFCでの体育教育のこれまで、そしてこれからについて、担当教員の加藤貴昭先生と東海林祐子先生に対談していただいた。

加藤 貴昭 × 東海林 祐子

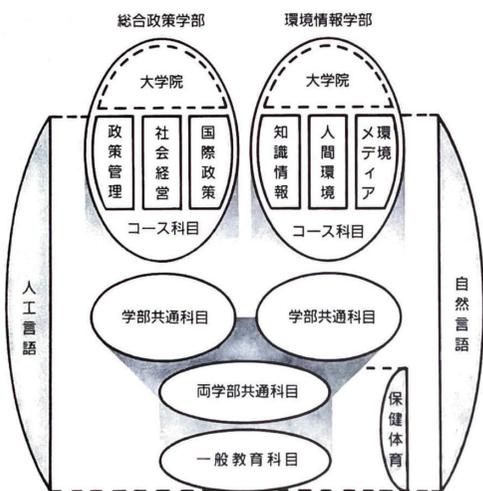


図 カリキュラムの基本構成 (当時)

う、他の授業と同じ考え方で保健体育を取り扱っていたわけです。

加藤 そこにも関連して、SFCを作る際、新しい学部名として「人間」「環境」「国際」といったキーワードが挙げられていました。やはり人間とか自分を起点として、取り巻く環境を重視していた。だから、自分自身の身体をきちんと鍛え、知ることから新たな学びや発展が始まるという考え方が受け入れられ、取り入れられたのだらうと思います。

東海林 現代日本の体育教育やス

ポーツ業界には、閉鎖的な空間や一方的な指導から生まれる体罰など、様々な問題があると思います。そうした一方通行で閉じた世界からは、主体的に自身の身体にフォーカスしアプローチする発想は生まれにくい。私は大学で体育学を学んでいたのが、初めてここに赴任した時はすごく驚きました。

●協働あってこそその体育システム

—SFCの体育は、根本の視点から斬新なのですね。

加藤 「ウェルネス」という言葉を使い始めたのもSFCが先駆けだと思えます。今となってはかなり普及してきましたけど、八〇年代の当時としては、斬新で面白い。

東海林 今のSFCみたいに、自分に合った取りたい種目を取りたい時に取るのが自然、という流れも当初から組み立てられていました。それもまた革新的です。

加藤 現在は「体育システム」でそ

●獣身を成して人心を養う

—それではまず、SFCおよび慶應義塾における体育授業の歴史を伺いたいと思います。

加藤貴昭先生 (以下、加藤) そもそも福澤諭吉先生は、健康についてすごく関心が強かったんです。福澤先生はもともと蘭学、医学を学んでいて、身体を鍛えるということを重要視していました。身体を動かすための設備も慶應義塾設立当初から整えられていて、明治時代の三田キャンパスの地図を見ると、身体を動かせる芝生や遊具がたくさんあります。

東海林祐子先生 (以下、東海林) ブランコもありましたよね。

加藤 そうなんです。あとは有名な言葉として「まず獣身を成して後に人心を養え」というものがあります。まずは獣の身体を鍛えてから、次に人間の心を養っていきなさい、という意味で、いかに身体づくりを重視していたかということがよく分かります。著書である『西洋事情』や、設立当初に慶應義塾の理念を広く知らせるため発表された『芝新銭座慶

應義塾之記』という宣言書の中にも、身体が健康でなければ学問も成り立たないという考えが記されています。『西洋事情』の中には、ヨーロッパでの授業形式として、学問をした後には必ず身体を動かすというものが紹介されています。実は最初期のSFCでは、体育の授業は必ず午後に行われていたんですよ。

—そうだったのですね！

東海林 そう考えると、SFCにはやはり福澤先生の身体や心に関する考え方が土台にあるのだと感じますよね。SFC設立の頃の資料(左図)を見ると、一般科目や両学部共通科目を支えるものとして、両側に自然言語と人工言語、そして下に保健体育があるという形になっています。そして、その体育の目標というのが「自己開発」で、「従来の『体育授業』という概念をこえて、環境の中での主体としての人間を、その根底において支えるものとして位置づけて」と書いてあります。授業を通じて、いかに自分の中にあるものに気づき、実践して開発していくかとい

ういった仕組みが実現していますが、実現までの過程も面白い。こうしたシステムは外部に発注すると莫大なお金が必要で、それは難しいとされてきました。そこで、当時二代目の環境情報学部長だった齋藤信男先生のゼミ生が立候補して作ってくれました。それはうまくいかなかったのですが、その後、SFCの教員であり優れたプログラマーでもある萩野達也先生(環境情報学部教授)が、自主的にボランティアで作ってくれました。たくさん教員や学生が協力してくれたからこそ、今の体育授業のスタイルがあります。現状では、体育の授業を欠席してしまう学生が残念ながらも出席しないと、したからにはきちんと出席しないと、システム自体が、そして授業が崩壊してしまふ。体育システムは学生と教員の信頼関係によって成り立っています。そういった根本の部分は、お互い大切にしていきたいですね。

●体育を活用する

—お二人の思う、SFCの体育の強みは何ですか。

東海林 やはり、大学での体育は高校までとは違うものなんだ、違うポイントを重視して進んでいくんだ、と感じてもらえるような試みは大事にしています。

加藤 体育が嫌いな人は、SFCには特に多いのですが、大学に入っればしばらく経つと、考え方も変わってくるようです。授業に参加しているうちに、自分が本当に取りたい種目や、するべきことが分かってくる。それが目に見えて分かるのが、祐子さんを中心に調査している「ライフスキル」です。身体を動かす意義を客観的に見ることが出来るのは、特徴的かつ重要なことだと思えます。

東海林 自分の心理面は、自分でも見えにくいですがね。何となくモヤモヤするとか、何が引っかかっているんだらうとか、分かっているようで分かっていないことを、ライフスキルアンケートを通じて可視化する。すると、「こういう目標設定が低かったんだ」とか「コミュニケーションへの積極性が足りていないんだ」とか、自分の伸びしろを認識で

きる。その認識、仮説を立てることが大事なんです。もちろん、授業を通して自分の可能性を引き出せることもあります。初めは「楽しい」というモチベーションから、どんどん競技の深みを探究していくことで、思わぬ自分に出会えるとか。様々なアプローチ方法を活用して、自分の心と身体のリンクを実感していけば、卒業して社会に出ても応用が利くはずですよ。

加藤 本当に、卒業してから体育の重要性を実感してもらいたいですよ(笑)。卒業して運動しなくなると、健康診断に引っかかって、お金を払ってジムに通って……、こういう流れに乗ってほしくない。大学生の時に様々な種目に触れて、卒業してからでも楽しく続けていけるものに出会ってほしいんです。そうした活動の積み重ねが、結果的にライフスキルの上昇にもつながるわけです。

東海林 もう一つの特徴は、サードプレイス的なコミュニティの形成ですね。SFCには研究会や、「体育1」で一緒に活動するクラスといったコミュニティはありますが、

います。私も見ていてすごくいいなと感じたのは、学生たちは障がいの有無に対して全く壁を作らないことです。気を遣ったりせず、ごく普通に捉えている。まさにバリアフリーだなと感じました。こういった場が自然に実現するところに心動かされました。

●コロナ禍を経て、未来へ

——これからの体育授業の展望をお聞かせください。

加藤 コロナ禍は大きな転換点になりました。授業がオンラインパスに戻って、リアルに会うことの大切さ、実際に顔を合わせて身体を動かすことの重要性を実感しました。オンラインではできないことが、オンラインパスの体育ではできる。そこに体育の価値があると感じました。

東海林 学生の皆さんも、コロナ禍で「運動しなきゃまずいぞ」って実感したと思います。自分の身体の変化、悪化を、どう楽しみながら改善していくかに意識が向いたようですよ。体育の授業も、コロナ禍によってリアル空間の取り組みがなくなっ

その後の体育の授業はまた違ったコミュニティを形成する場にもなっています。いつでも取りたい時に取りたい種目を何でも取れるのが魅力の一つではありますが、何気なく取った種目が面白かった、先生が面白かった、と同じ授業をリピートする学生も多い。それも一つのコミュニティです。一緒に身体を動かして、種目を究めていったり交流を深めたりできる講師の先生たちは、学生たちにとってとても近い存在だと思います。「この種目で、あの先生はこう言っていたな」とか、何気ない言葉が残っていることもあるのではないのでしょうか。そういった交流の場づくりも目指していきたいです。

加藤 講師の先生たちもバラエティ豊かで面白い方が多いです。今も総合格闘家の方がいたり、日本代表の監督やメダリストがいたり。学生サイドとしては、何となく行ってみたらテレビで見たことあるすごい人がいた！みたいなことにもなる(笑)。そうした何かを究めた先生たちに教わる機会はなかなかないので、ぜひいろいろな種目に参加して

自分、その種目の楽しみ方を知ってもらったり、理論面でのアプローチをしたりしていました。その一つに、中澤仁先生(環境情報学部教授)や大越匡先生(環境情報学部准教授)の研究室と連携して、デバイスを活用した健康に対するアプローチを行うという取り組みがあります。他にも、例えば國枝美佳先生(総合政策学部専任講師)による生協のウェルネス弁当といったプロジェクトなどもありますね。「健康」を体育だけではなく、様々な研究室やプロジェクトとの連携で作っていったらいいなと思います。

加藤 そういったコラボレーションと関連して「デジタルウェルネス」という言葉を紹介します。最近eスポーツによる高齢者の脳機能改善について研究していますが、楽しくゲームをプレイするだけで注意能力や実行能力が伸びていく、というものです。これまではデジタルデバイスを使うと依存症になるとか、マイナス面が大きく取り沙汰されていたと思いますが、そこをひっくり返してプラスに取り上げてみる。「使う

ほしいです。

東海林 二〇二二年度の秋学期からは、合理的配慮の必要な障がいをお持ちの先生も着任されました。例えば火曜日に行らっしゃる上原大祐先生(環境情報学部講師)はパラリンピアンでメダリスト、車いすを利用されていますが、学生たちはそれに自然と馴染んでいる。これまでもバリアフリースポーツの授業はあり、人気の授業の一つですが、授業の前に学生たちが早めに集まってきて、上原先生を囲んで話をしている場面を見ると、こういう実体験の場は大事だと思います。木曜日

にも様々なプロフィールの先生たちがいらっしやいますよね。

加藤 そうですね。木曜日の先生方は、パラリンピアンの方やメダリストたち。そんな方々に、ボッチャやゴールボールといったパラスポーツを教えてください。

からこそ健康になる」という発想の「デジタルウェルネス」をどう発展させていくかも考えていきたいです。

東海林 あとは、地域との関わり方も課題ですね。

加藤 SFCは藤沢市の「健康と文化の森」という構想の中にできたキャンパスで、文化の拠点、健康の拠点を、総環両学部に、医療学部や湘南慶育病院に置きたい、という意図があります。最近藤沢市自体の取り組みも増えているようです。地域一帯で健康と文化という大きなテーマに取り組むという志が、構想ができた八〇年代から現在まで受け継がれています。

東海林 授業でもその構想を組み入れて、地域の人の関わりや全体での健康に対する意識創出ができるような仕組みを作りたいと思います。



東海林 祐子 (とうかいりん・ゆうこ)

政策・メディア研究科准教授
スポーツコーチングとそれを基軸としたライフスキルプログラムを専門とし、コーチングにおける心理的葛藤の定式化やライフスキルの幅広い応用について研究を行っている。

加藤 貴昭 (かとう・たかあき)

環境情報学部教授
人間工学、スポーツ心理学を専門とし、スポーツ選手をはじめとする人間の身体・心理機能特性を研究する。現在は、ゲームを用いたヘルスケアや世代間交流など、eスポーツの持つ可能性を追求している。

教員座談会 「経験の学」 “生きる”という 実践の術を 学問にしたい

大学院設置科目である「経験の学」を担当する諏訪正樹先生、加藤文俊先生、石川初先生に今号の特集タイトル「動く。動かす。考える。」をテーマに語り合っていた。研究職からSFCの教授となった諏訪先生とSFC歴20年の加藤先生、サラリーマンを長く経験した石川先生という三者三様の「経験」に即してお話を伺った。

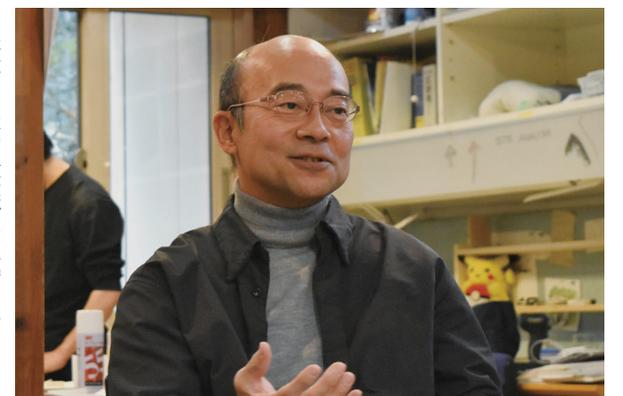


諏訪 正樹 × 加藤 文俊 × 石川 初

●「経験の学」を始める
——「経験の学」とはどんな授業なのでしょう。か。

諏訪正樹先生（以下、諏訪） 前身は、「生活実践知（略称「LIFE」（エルキップ）」という、二〇一一年の秋学期から始まった授業です。僕が加藤さんに声を掛けたことがきっかけで、石川さんがSFCで教鞭を執り始めた時にも「ぜひ一緒にやろう」と誘いました。何か一つ小さな研究を学生が発表して、その実践研究に対して「（経験の学）的にどうか」というコメントを我々教員がしまくる授業です。

加藤文俊先生（以下、加藤） 授業ではあるけど、学期末に「まとめ」をしない授業です。三か月くらいの活動で、性急に結論を語ることも自体も、この授業では見つけ直しています。もちろん課題を出せば学生たちはそれに応えるだろうけれど、この授業ではもっと複雑で難しいことを扱おう、考えようと試みているのに、三か月の授業の後で「まとめ」ができることを問い直したいわけです。黙っていても「最終回」がくるよう



な学事日程で授業が編成されているのも、「経験の学」的には不自由なところ。考え方を少し変えてみると、学期が終わるとようやく「あの研究は、面白かったよね」と話が始まる。だから、次の学期になって「先学期はこうだったよね」という想いが生き続けるんです。そこがすごく大事だと思って続けています。

——何人くらいの学生が最初に参加しましたか。

——先ほどおっしゃった、授業開講のきっかけでもある「違和感」とは何ですか。

諏訪 簡単に言うと、人は、世の中で生きている時に社会生活であれ、自分の家庭生活であれ、ある種、「生きる」実践をしています。けれど、実践の一番生々しいところはなかなか言葉になりにくく、従来の学問では切り取れない難しさがあります。僕も自分を被験者にして、野球の打撃スキル（特に身体に近いインコース球を打ち返すスキル）の学びの研究をしています。実践研究において、他の人に自分の生々しい体内感覚をそのまま伝えることは難しい。とはいえ、この生々しさを抜きにして、人が生きるという実践は語れない。従来の学問ではこの分野に太刀打ちできていません。学問の方法論や「べき」という考えが強すぎて、大事なものが切り落とされてしまうことに危機感を抱いたのが動機です。

が一つの例だと思います。ランドスケープの「庭づくり」はある種の実践です。造園の学問体系なるものをそういった着眼点で切り取る人がほぼいない中で、自分の身体感覚という生々しいところで実践をし、その実践をあえて言葉にすること。学術研究の学と術は分かれていて、多くものものに術はあっても、学は存在していない。だからこそ、「学」として切り取る時に大事なところを切り捨ててしまわないようにしたいという授業です。



諏訪 四、五人くらいでした。最近人気が出てきたのか、今期は八人。去年の秋は十人を超えるほどでした。

石川初先生（以下、石川） ここ二学期は以前の進め方ができなくなっていて、諏訪さんが、二つ並行でセッションをして教員が入れ替わるようにする工夫をしたり、外部から先生をお呼びして講師を増やしたりしています。

あまりよろしいことにならない。学生が多いとそれだけで内容が薄くなってしまうことは避けたいと考えています。

石川 コメントや議論が勉強になるんだよね。

——先生方も勉強になる授業なのですね！

石川 学生は我々の知らないことを調べてくるし、参加されている先生方のコメントもすごく面白いんだよね。でも、学生の発表するケースが個別すぎて、なかなか普遍化ができない。一言でキレイに説明できるような授業のまとめはないです（笑）。

諏訪 そんなものはすぐに出ないです。

石川 ハハハ。

諏訪 世の中は普遍化に走りすぎているけれど、うわべだけを取って普遍化した気になっているだけというところに、この三十五年間、大いに違和感を感じてきたからこそ、この授業を開講しています。

●「実践」の生々しさを切り取る難しさ

——具体例を教えてください。

諏訪 それこそ、石川さんの経歴





「二〇一八年から、大学のシステム変更に伴って『経験の学』という名前に変更されたんですね。コロナ禍での変化はありましたか。」

加藤 ここ二年の間に入学して卒業した学生は、そもそも最初からZOOMなので、他のやり方を想像しようがないですが、あれはあれで、面白かったと思います。大学院はむしろ広がりを持たせられました。時差さえ調整できれば海外とだってつながられることは良いと思います。

諏訪 加藤さんがZOOMをうまく利用してくださったのも大きかったです。京都在住の外部講師を招い

て、という授業はZOOMじゃないとできなかった良さですね。

石川 むしろオンラインの面白さですよ。教員が東京と京都と函館にいて、学生はカザフスタンと日本にいる。

諏訪 日本のどこにいても分らないし。そうそうそう(笑)。

●「出会う」も入れたい

「今号の『動く。動かす。考える。』というテーマを聞いた時にはどう感じましたか。」

諏訪 自分の身体を動かすことによって外界に自分の身体を連れ出すこと。まさに僕が本に書いていることと一緒に感じました。意図的に計画していても、自分の身体を連れ出すとその通りにはならない。縛られることなく、何が待っているかわからない外界との出会いにオープンマインドで身を委ねる、これは身体知を学ぶ一番基本のサイクルです。一個一個の出会いが前の出会いに依存していて、前の反応が次の出会いのきっかけになるという積み重ねがあります。あらかじめモデル化でき

ない時間の積み重ねである「経験」をどう「学」に落とし込むか。今も考えています。

加藤 教員という立場からは、タイトルにもう一つ「考えさせる」も入れたいです。「考えさせる」という「上から」のイメージがあるかもしれないけれど、考えやすくする環境を作ることではできると思いますが、必ずみんなが考えてくれるとは限らないけれど、考えやすくなるように時間や空間を調整する、授業を作る、場を作る、ということ。だから、僕だったら「動く、動かす、考える、考えさせる」。タイトルはこうしますね(笑)。

「主体を取り巻く環境を整える」とは、ランドスケープにも共通しそうです。

石川 まさに「動く、動かす」は造園の方法ですね。植物は動かないと思われがちですが、年単位の時間で見れば花も土も動いています。風景は大きな動きの中にあるもので、水をやったり土を入れ替える作業はその場所に新しい動きを与える行為でもある。そして考え、考えさせる。

諏訪 欲を言うと、タイトルに「出会う」も、入れたいですね。

「最後にSFCの学生に向けてコメントをお願いします。」

加藤 本講義は「生きるリアリティ」を大事にして、探究している授業です。今は授業の時間で、次は何の時間で、と僕たちが勝手に作っている時間や空間の編成から疑って、あえて踏み越えることが重要です。そのきっかけにこの授業がなっていると思います。

ついでに、今、Hヴェレッジという学生寮を建設中(取材当時)じゃないですか。成り行き上関わっていることもあるけど、学生時代は四六時中勉強するのがいいですよ。もちろん、勉強する場所は教室に限られているわけではないので、寮の共有スペースやダイニングなど、そういった場所で学ぶ生活をする人が増えて、何か変化が起きたらいいなと思っています。

石川 「経験の学」では、決まり文句で話を済ましてしまいたいそうになると「他の言葉で言ってみて?」「どういうことを感じたり、見たりして

その言葉に迫り着いたの?」と教員から総ツッコミされます。SFCの多くの学生は「口当たりの良い決まり文句をどう組み合わせたら大人が喜ぶか」という技術を磨いてきちゃっているところがあると思います。けれど、分かったようなことをいうことで説明した気にならない方がいい。これは私自身も「経験の学」で学んでいることです。愚直でも良いから自分が経験したことを考えて探り当てるのが重要です。だから、自分が説明した気になっていたり、こう言えば教員が喜ぶと考えてりしていないか、もう一度見つめてみてください。

諏訪 石川さんが話したように学生の多くは頭が勝っている感じがするので身体が勝ってほしい。トップダウンではなく、ボトムアップをまずは大切にしてください。自分の経験した風景や土地の違い、そこに誰がいて何があったか、その個別具体的な部分を端折ることなく、伝えていってください。

「ありがとうございます。」

(構成:青木陽花)

石川 初 (いしかわ・はじめ)

環境情報学部教授
東京農業大学農学部造園学科1987年卒業。ゼネコン設計部で28年間設計の実務に携わった後、2015年からSFCで研究・教育にいそしんでいる。2020年に、座談会メンバーである諏訪先生、加藤先生に副査をお願いして博士論文「ランドスケープ思考—思考法としての『ランドスケープ』の再定義—」を提出、博士(学術)の学位を得た。

加藤 文俊 (かとう・ふみとし)

環境情報学部教授 / 政策・メディア研究科委員長
慶應義塾大学経済学部卒業。三田に通いながら、恩師の高橋潤二郎先生が「新学部構想」について語るのを聞く。少しずつSFCの輪郭がかたどられている頃、アメリカに留学。2001年からSFCで「加藤研」の活動を開始。コミュニケーション論の観点から「居心地のいい場所」について考えている。



諏訪 正樹 (すわ・まさき)

環境情報学部教授
東京大学工学部1984年卒業、同大学大学院工学系研究科1989年修了(工学博士)。人工知能を学び、その後認知科学の研究にも手を広げる。自身を被験者にした「一人称研究」として、野球の打撃スキルの学びの研究も。2008年からSFCで教鞭を執る。「生活のあらゆるシチュエーションで我々は身体知を発揮している」と、実践研究の大切さを説き、本授業を開講。

動くことと考えること。
そして、それらをつなぐもの

学生インタビュー 01
ランナーたちの座談会

仰木裕嗣研究会
體育會競走部



田辺 勇希

田島 公太郎

尾崎 里紗

今回取材したのは、仰木裕嗣研究会と體育會競走部に所属し、体や運動について日々考え、動き、経験している3人の学生。動くこと、動かすこと、考えること。それらの関係を探るべく、座談会形式でお話を伺った。

●研究は経験、そして気づきから

—皆さんは、研究会でも競走部でも一緒に活躍されています。研究の面からまずお聞かせください。

尾崎里紗さん（以下、尾崎） 私は特発性側わん症の治療用コルセットを、3Dプリンタを用いて作ろうとしています。私自身その患者で、高校三年生の夏に病院でコルセットを作りました。コルセットは、お医者さんの前で下着だけになり、石膏を染み込ませたガーゼを体にぐるぐる巻きにしないと作れません。これが本当に嫌でした。あまりにも嫌で泣いている女の子を見たこともありま。そこで、デジタル技術を使い、心理的ストレスをなくしたいと考え始めたのがきっかけです。

田辺勇希さん（以下、田辺） 僕は、運動に対して無関心の人も運動したくなるようなまちづくりを考えています。特に無酸素運動¹や短距離走にフォーカスしたまちづくりのために、今は動作の研究をしています。

—動作の研究とは、どのように行うのですか。

尾崎 まずは「Mathematica」という数式処理システムの勉強をしないといけないですね。仰木研のメンバーなら、必ず通らなければならぬ専門です。

田辺 そうだね。フォースプレートやモーションキャプチャ装置などで動作を数値化し、「Mathematica」で解析します。フォースプレートというのは、上から加えられた力の大きさと向きを計測できる板状の実験器具です。そもそも、運動の動作を測るのは手間が掛かります。モーションキャプチャを屋外で使う時は、一日がかりで設置します。

—田島さんは、どのような研究をされていますか。

田島公太郎さん（以下、田島） ランニングフォームを分析すること、その人に最も合ったシューズを提案するシステムを作りたいと思います、研究しています。今年の一月に

箱根駅伝の予選会がありました。その時の区間順位が最下位でした。

コンディションが良くなかったけど、だと思っていました。同じシューズを履いて走ったレースの結果がこことごく悪いことから、原因はシューズではないかと思に至りました。僕のシューズはソールが反り上がっていて、前に体重をかけると足を進めてくれます。でも、歩幅が短い走り方をすると、ピッチ²が狂い、フォームが崩れる原因となります。爪先まで地面に着いているシューズの方が合っているようです。

田辺 シューズのことと言うと、僕はストライド型³でピッチがあまり速くないので、ピンが地面に刺さることで反発を受けられるスパイクが走りやすいです。足全体が接地するフラットなもので、できるだけ傾斜の少ない靴がいいです。

尾崎 私は全くこだわりがないですね(笑)。高校で陸上を始めましたが、三年間ずっと同じスパイクを

使いました。当時のコーチも、走り方を教えるよりも、ひたすら走らせる方でした。シューズや練習方法についてしっかりと考え出したのは、大学に入ってからです。

田島 僕も、高校で陸上競技を始めた時は、シューズのことは気にしていませんでした。だからこそ、フォームから解析して最適なシューズを提案できるシステムを作りたいです。最初のうちは、走り込めば記録は伸びますが、ある程度実力が付いてくると、道具の工夫も必要です。シューズが合わないとい怪我をするし、記録も伸びなくなるし、競技が楽しくなくなります。

—頭だけではなく、身体を動かすことで研究が進んだことはありますか。

尾崎 私はいつも、あれこれ考える前に行動します。研究会に入る時も、大学入学前に仰木先生に直接連絡をして見学に行きました。でも、今は研究に必要な解剖学の勉強で少



生まれ、進んでいるのですね。

尾崎 田辺君には、なんだっけ、吉祥寺駅の話が……。

田島 人を数えまくったという伝説があるよね。

田辺 実は……(笑)。街中に運動施設がたくさんあっても、運動に関心のない人には敷居が高い。一方で、どんな人にも日常の中でつい走ってしまう瞬間がありますよね。電車に乗り遅れそうな時とか、青信号が点滅しかけそうな時とか。そういった瞬間を見るために、通勤ラッシュ時の吉祥寺駅に行って、一時間くらい観察しました。

尾崎 井の頭線とJR線が乗り入れるから、乗り換えで走る人もいるね。

田島 周りからのプレッシャーです。「走れ〜走れ〜」というね(笑)。
田辺 僕も、スポーツが好きかと言われたら、微妙です。満足できる結果を出していないので。でも、こんなに打ち込んでいるのだからやはり好きなんだろうと思います。僕にとって良かったのは、陸上を通して

●好きではないけれど、動いてみるのもなかなかいい
 — 身体を動かすことの良さは何でしょうか。
田島 僕はスポーツは嫌いなので……。
尾崎・田辺 ええ!?

田島 僕は四年かけて踵から接地する癖を直しました。ドリル運動⁴などを積み重ねることでフォームが
尾崎 フォームの改善は、動画を撮ってもらい、直すべきところを確認し、そこを意識して走ることを繰り返します。
田島 僕は四年かけて踵から接地する癖を直しました。ドリル運動⁴などを積み重ねることでフォームが

変わりに、記録が伸び続けました。
田辺 僕の所属する短短ブロック⁵では、毎回講義を聞いてから走る練習をしますが、実際に走ってみるとできないことばかりです。でも、走りながら、自分ができない部分を感覚的に捉えて、どうやったら直せるかを考えるんです。そうすると、次は少しいい走りができる。この繰り返しです。身体のセンサーを働かせることがとても大切です。
尾崎 知識を持つているのとそれを実行するのって違うよね。

友達がたくさんできたことです。人間関係の構築はスポーツが担える役割の一つだと思います。
尾崎 悩み事や考え事が溜まって、もう逃げ出したくなった時、家の周りを走ります。無心になれます。何も考えない時間を作るための運動というのも良いですよ。
田辺 分かる。頭の中がスッキリする。
田島 やっぱいいかもな、運動(笑)。僕は、運動はともかく、それによって得られる筋肉は好きです(笑)。懸垂が得意ですが、それ自体が楽しいわけではなく、胸筋が増えることが楽しい。自分の成長を可視化できるのは嬉しいですよね。
 (構成:松本(こころ))

●走ること考えること
 — 学んだ理論を実践につなげるために工夫していることはありますか。
田辺 一度に全部解決しようとしていないことですね。ポイントを一つ決めて練習します。
尾崎 練習日誌に「今日はここだけを意識して走る」と書くことがよくあります。走りながら二つ以上のことは考えられないから(笑)。いろいろ考えながらだと、ロボットみたいに走りが硬くなる気がします。
田島 長距離走は意外と頭脳戦で、レース中にいろいろなことを考えながら走ります。前の選手を観察して、追い越すタイミングを見計らいつつ、自分の身体の状態も細かく把握して……。
尾崎 短距離走と全然違う! 一つのことだけを考えていたらダメなんだ。
田島 一般道のレースなら、傾斜の様子を見極めたり、微妙なカーブ



田島 公太郎 (たじま・こうたろう)
 環境情報学部2年。仰木研所属。競走部、長距離ブロック長。

尾崎 里紗 (おざき・りさ)
 環境情報学部1年。仰木研所属。競走部、短短ブロック。

田辺 勇希 (たなべ・ゆうき)
 環境情報学部1年。仰木研所属。競走部、短短ブロック。

仲谷正史研究会
政策・メディア研究科
修士課程 1年

尾寺 美音



修士課程に進み、日々仲谷正史研究会で肌が視覚に与える影響について研究を重ねている尾寺さん。尾寺さんの研究内容や研究会での活動を通じて、体感から得られる学びに迫る。

●研究テーマとの出会い

——まず、SFCに進学を決めた理由や仲谷正史研究会（以下、仲谷研）を選んだ理由を教えてください。

高校生の時に出張授業があり、SFCの先生方から多様な学問分野について講義を受けて、興味を持ちました。様々な研究内容や授業の工夫を知り、初めて学ぶことにワクワクしたのを覚えています。私は高校までチアダンス部の活動に一生懸命取り組んでいて、勉強に全力で向き合い切れていなかった部分がありました。そのため、大学では自分の興味に向き合って、自分だけのスキルを高めることに挑戦したいと思い、入学を決めました。

高校時代にチアダンス部に所属していたことから、観客に与える印象や表現に関心がありました。学部二年生の時に、仲谷先生が開

講している「触覚と社会」という授業を受けて、「感性評価実験」という、人間に与える印象を評価する実験を知りました。例えば、人間が何かに心地よさを感じる原因や、何かを食べたいという感情を引き起こす要因など、人間が無意識のうちに行っていることを分析することで深く人間について知ることができます。このことに魅力を感じ、仲谷研に入ることを決めました。

——学部生の時にはどのような研究をしていましたか。

「肌の実体質感が与える深奥質感」というテーマで研究をしていました。

具体的には、メイクアップをして肌のツヤ感が変化することで、肌の質感や見え方がどう変わるかという研究を行いました。この研究によって、知覚メカニズムの解

明につなげようと思っています。予備検討として、無数にあるメイクアップ方法を分類し、各手法ごとの特徴を見出しました。今後は、

感性評価実験を実施して人間の肌におけるツヤ感とは何か、ツヤ感は何を見て判断されているのかなどを明らかにしていこうと思っています。

——修士課程ではどのような研究をされていますか。

「ヒト肌の視覚質感の環境情報学」というテーマで、肌について多角的に研究を進めています。仲谷研では、「〇〇の環境情報学」と題して研究することが多いです。

具体的には、背景のテクスチャや、イメージが肌印象に与える影響や、背景のテクスチャのコントラストの変化が起こす顔の彫りの深さの錯覚現象について研究しています。

——なるほど。証明写真などの背景に応用できそうですね。

そうですね。でこぼこした背景テクスチャの方が印象がハッキリする、もしくはミステリアスな雰囲気にも見えるなど、本人だけでなく周囲の環境情報によっても印象が変わり得る背景テクスチャだと分かったら、学術的にも面白いなと考えています。

●悩んだら何かやってみる

——今号のテーマでもある、体や五感を働かせることの重要性や、体感から得られる学びに気づくことはありますか。

体感から得られる学びについて、最近実感したことがあります。私が修士課程に進み、どのように研究を進めていくべきか悩んでいた時に、仲谷先生から「一回遊んでみていいよ」というアドバイスを受けました。そこで、インスタグ

ラムのアカウントを開設してみました。真ん中にある女性の背景だけが変化していく画像や、光や環境を変えながら様々な方法で撮ったマネキンの画像などを投稿しています。しかも、平日は必ず投稿しています(笑)。実際に毎日多くのサンプル画像を作成していく中で、背景が変わることによって、肌の印象や質感、顔の彫りの深さ

が変化して見えるという現象を見つけました。真ん中にある女性の顔は変わっていないにもかかわらず、背景によって肌にツヤが見えたり、彫りが深く見えたりする現象などです。それが、今の研究テーマにもつながっています。悩んだら何かやってみる。手を動かしてみる。そういったことが大切なのかなと思っています。

——そのインスタグラムアカウント、気になります！

すごく不気味な雰囲気です、何も知らない人が見たらびっくりすると思います(笑)。

例えば、背景がふんわりとした和紙のような質感だと、肌の質感がふわっと見えたり、背景が大理石だと、大理石のツヤのおかげか、肌がツヤツと見えたりします。他にも、でこぼこしたテクスチャの背景では他の画像に比べて彫りが



深く見えたりと、女性の画像は変わっていないにもかかわらず、視覚の錯覚によって顔の印象が変わって見えるのが面白いなと思いつきながら研究しています。

——今後の目標をお聞かせください。

メイクアップの研究では、感性評価実験を行うことで、例えば「触れてみたい」とか「写真を撮りたい」とか、人が肌を見た時に想起する感情と行動を結びつけて、メイクアップの変化による印象変化の可能性を探っていきたいです。

この研究を行うことで、例えば切ない曲のミュージックビデオを作りたいと思った時に、登場人物に切ない印象を与えるメイクアップを施し、より切なさを引き立てられるようになるのではないかと考えています。

研究以外では、サウナが大好き

課程の勉強や研究を通じていろいろな解析方法を学んでいるので、それを応用して、サウナのパラメトリックデザイン²を作ってみたいなと思っています。

●学生が抱えている日頃の疑問を研究できる環境

——所属されている仲谷研はどのような研究会ですか。

研究会の特徴は、独自の感性を持った人たちが集まっていることだと思います。

例えば、メンバーの中には、「料理の環境情報学」と称して、メイレンディッシュの唐揚げの付け合わせの種類を変化させることで、人間が想起する食欲がどのように変化するのか、という研究をしている学生がいます。

その他には、研究会を主催する指導教員がデータサイエンスを教えているということもあり、数学

tsuyakanbeauty_today

145 投稿

19 フォロワー

0 フォロー中

尾寺さんの
Instagramアカウント
@tsuyakanbeauty_today

“Tsuyakan” study

- Dewy skin
- Glass skin

#makeup #beauty

なので、いつか自分が思う最強のサウナを作ってみたいです。サウナは、薪が与える音だったり、肌で感じる暑さであったり、すごく五感が研ぎ澄まされる空間で、とても魅力的に感じます。私は修士

に苦手意識がある学生に対して、数学との付き合い方が楽しくなるような「数学大喜利」を、修士研究会の最初に毎回提供してくれる学生もいます。その学生の研究テーマではないのにもかかわらず、毎回面白い話題を提供してくれるので、とても盛り上がっています。

まとめると、学生の日頃の疑問を、知覚・認知・感性などの手法を扱い、人間の知覚先端科学である深奥質感研究としてアウトプットするという研究会です。

研究成果として、プロダクトデザイン制作物を論文として投稿したり、ギャラリーで展示したりすることもあります。年に二回、春と秋の学期末に開催しているオープンラボイベントでは、研究会での研究成果物を公開しています。研究会の成果物は学会発表や国際論文掲載という形で情報発信をされています。



——仲谷研に所属したい学生にメッセージをお願いします。

私は仲谷研にしか所属していない上、他の研究会も全く見ていないので、あまり他の研究会との比較ができませんが、仲谷先生の人柄が寛容なこともあり、かなり自由に研究テーマを決められる研究会だと思います。自分の興味のあるものを突き詰めて研究していきたい人にとってもぴったりなのではないでしょうか。

(構成：工藤美桜)

尾寺 美音
(おでら・みお)

政策・メディア研究科修士課程1年

「肌の実体質感が与える深奥質感の研究」, 慶應SFC学会 学術交流大会2022, オンライン口頭発表, 2022年3月 (奨励賞受賞)

「肌の実体質感が与える深奥質感の研究」, 日本視覚学会 2022年夏季大会, ポスター発表, 2022年9月

「実体質感としての人間の顔における顔の彫りの深さ知覚の研究」, 深奥質感領域班会議, ポスター発表, 2022年9月



注1 深奥質感：現在、先端的な研究で主張されている新しい概念。以下のウェブサイトを参照。「実世界の奥深い質感情報の分析と生成」(https://shitsukan.jp/deep/ 最終閲覧日 二〇二三年一月二四日)

注2 パラメトリックデザイン：設定されたパラメーターの数値を変えることで、設計者の想定を超えるような種類の三次元デザインを創出する手法のこと。

瀬尾 みなこ

看護医療学部 4年

看護医療学部に通いながらも女優を志し、日々鍛錬を重ねている瀬尾さん。そんなハードなダブルスクールも難なくこなす、パワフルな瀬尾さんが考える「動く。動かす。考える。」は何か。



●挫折を学びへ転じる

——SFCの看護医療学部に進学した理由や、その時の将来の目標を教えてください。

中学高校と女子硬式野球部でピッチャーをしていました。その頃、将来は、何かスポーツに関わる仕事になりたい、アスリートのトレーナーになりたいと考えるようになりまして。トレーナーになるために「スポーツ医療」を学びたいと考えた時に、慶應にはスポーツ学部はなかったのですが、看護も医療のことなので、看護医療学部を受験しようと思いました。

——高校時代のスポーツの経験を学びに活かしているとお聞きしましたが、詳しく教えてください。

高校の時は週に六日部活をやっていた、火曜日から日曜日までずっと

と活動していました。春から秋は大会に参加して、試合のない日や冬は一日中練習をする、というスケジュールでした。でも、その中でやっぱりうまくいかないこともありました。試合に出られないとか、イップス^注のようになり、プレーするの、特に投げるのが精神的に怖くなってしまったとか。その経験が大きかったです。看護の現場には自分の力ではどうにもならない苦しみを持つている方がいて、そういう方の思いは、看護を今まさに学んでいる理由にもつながっていると思います。また、スポーツを週に六日やっていたことが、体力的にも本場に役に立ちました。それに、元々スポーツの経験から身体のことを学びたいと思って看護医療学部に入学したので、そういう意味では好きなことを学べているというのは大きいですね。

●学びも部活も全力で

——コロナ禍の大学生活ですが、思いや印象に残ったエピソードがありましたらお聞かせください。

大学に入って女子ソフトボールに所属したのですが、一年生の時はコロナ禍ではなかったため、矢上キャンパスで朝六時半から二時間、ソフトボール部の練習がありました。その後にはSFCのジムで走って、それから授業を受けていました。他の学生はその頃ようやく一日が始まるはずなんですけど、私はもう一日が終わったみたいな顔をしていて。「なんかすんごい疲れてるじゃん」みたいな(笑)。コロナがはやった年は、秋になって部活動が一部再開することになりました。その秋まではやり切れたという思いがありました。三年生になった時に、実習や授業と部活

動との両立が難しくなって、いろいろ考えて、初めて自分を見つめ直しました。

他の学部の授業もよく取りました。大学一年生の時はトレーナーになりたいという思いが強かったので、スポーツの授業などを多く取っていましたね。コロナがはやったからは、授業がオンラインになったので、三田キャンパスの授業を取るようになりました。一度、看護の試験と三田の授業の試験が重なったことがありました。看護の試験を追試に回すこともできず、たが、看護の試験は二つあって三田は一つだったので、看護の試験を一時間受けてから急いで三田に行って試験を受けたことがあります。

実習期間はコロナ禍の最中でした。実習の二週間前から課外活動は禁止、外出もなるべく控えること

いった制限がありました。実習の最中も、コロナにかからないように気を張り続けて、精神的にも少しづつ良かった面がありました。他にも、実習の記録を書くために、人生で初めて徹夜をしました。もう一回やれるかと言われたら少し悩んでしまいますが、めったにできない、良い経験をしました。

——看護医療学部の宮川祥子先生から瀬尾さんのことを紹介していただいたのですが、瀬尾さんは宮川先生の授業で印象に残っていることはありますか。

宮川先生の授業は週に一冊本を読んできて、もう一人の学生と先生と三人で討論するという形式でした。その上で、二週に一回、自分の経験などを交えて、その討論で述べた自分の意見をA4サイズの紙に一、二枚書いていました。全

力で取り組んではいきましたが、本の内容が難しくってちゃんとしたものが書けていないという自覚はありました。それでも宮川先生は絶対に怒らないですよ。なぜ怒らないんだろってずっと思っていました(笑)。普段は本をそのまま読んでいなかったことに加えて、初めての経験で頭が追い付かない





に追い回されていた時、看護とはまた別の視点を手に入れることができたのは良かったと思います。

● 答えのない世界を追求して

現在は身体表現を使うキャリアにチャレンジしていると聞きしましたが、どんな活動をされていますか。

まず、女優を目指して、スクールに通っています。週に四回ほどですがWスクール用のコースがあります。そこで演技の基礎から映像演技と舞台演技、歌唱、ジャズダンスを習っています。女優になった時に全てできた方が自分のためになるはずですから、そういうカリキュラムに取り組んでいます。「感情を解放する」という練習が難しい。日常では常に感情を解放していたらやっていけないので、どこか理性で抑えていることを実感

ところもありました。それでも、

宮川先生の部屋にある、今まで触れたことのないような哲学系の本などを借りて、定期的に読み、その内容を話し合うという時間は貴重でした。

その頃は看護の実習もあって、忙しく動いたり記録を書いたりしていました。けれども、そうした活動

す。親には心から感謝しています。

● 大切なのは飛び込む勇氣

—— 全ての活動に通ずるような、理念やポリシーがありましたら教えてください。

「まずやってみる」ということを大事にしています。いいか悪いかは別にして、つい足を踏み入れるのをためらうこともあると思いますが、やっぱり学生でいる間は、時間があるなら何でもやってみようよ、と。だから、「大切なことは気持ち次第」、「意志あるところに道は開ける」という言葉は本当に素敵だなんて思います。そういう思いで、週に四回のスクールも楽しく通っています。病気や怪我で難しいこともあるかもしれませんが、基本的には、本当にできないことはないと思っています。それに、家族も言ってくれますが、あ

しています。ゆくゆくはNHK大河ドラマに出演したりするぐらいの女優として活躍していきたいと思っています。現在、今年あるオーディションに向けて頑張っています。芸能とスポーツは一見違うようですが、徹底的に答えのないものを突き詰めていくところは同じです。だから、オーディションのライバルを含めた、芸能に携わる人たちは皆アスリートと同じような心持ちでいる人が多く、気が抜けません。最近ではオーディションのために午前中に起きて柔軟体操して、散歩して、ちよつとダンスして発声練習をしています。それから映画を見たりもしています。

TOEICの勉強のため、英語の塾にも通っています。他にも、春学期や夏休みの期間に学校の保健師コースを選んで実習に行ったのですが、その保健師の資格を取る

——最後にSFCの学生に向けて一言お願いします。

SFCは本当に良いキャンパスです。文系らしい授業から理系の授業まで幅広い。それこそスポーツならスポーツを突き詰められます。逆に広く浅くやろうとしたら全部の授業を取ればいいですし、自分で選べるのは本当に素敵なことだと思います。だから一つのことを決めて頑張るのもよし、明確に決まっていなくても、逆に興味がない授業も頑張ってみるのもよしです。それだけでいいこと尽くしです。もちろん自分のキャパシティの限界などもありますし、やりたいこと、他のバイトや遊びも大事にしてほしいです。

(構成：荒井美海)

注 イップス：意識的、もしくは無意識下の精神の緊張状態により、自分の行いたい動作ができなくなってしまう心理的状態のこと。スポーツ選手などに多い。



瀬尾 みなこ (せお・みなこ)

看護医療学部4年

中学・高校時代を硬式野球に打ち込み、大学では看護医療を学ぶがたわら、芸能スクールで女優業も学ぶ。

ための国家試験の勉強をしたり。もちろん看護師国家試験の勉強もしていますよ(笑)。また、大学院に進むことを考えているので、今年の春は猛勉強していました。でも、看護師や保健師になることも考えましたし、一般就職も考えました。今年の夏にはいくつかインターンにも参加しましたし、十分に考えた上での大学院進学という決断でしたね。それに加えて、可能な範囲でアルバイトもしていました。こんな感じでいろいろなことをしているの、宮川先生に「あなたの一週間ってどれだけ変わるの、どれだけニュースがあるの」と言われたことがあります(笑)。

—— すごい生活ですね。体力があるって大きいメリットになるんですね。

そうですね、本当にそれは思いま



No.07

視野を広げて、世界を動かせ

上山 信一 (うえやま・しんいち)

経歴：2003年-2007年 政策・メディア研究科 特別研究教授
2007年-2023年 総合政策学部 教授
学位：修士（公共経営学）
専門分野：企業の経営戦略、行政改革、地域再生、
ミュージアムマネジメント

●お気に入りの一枚

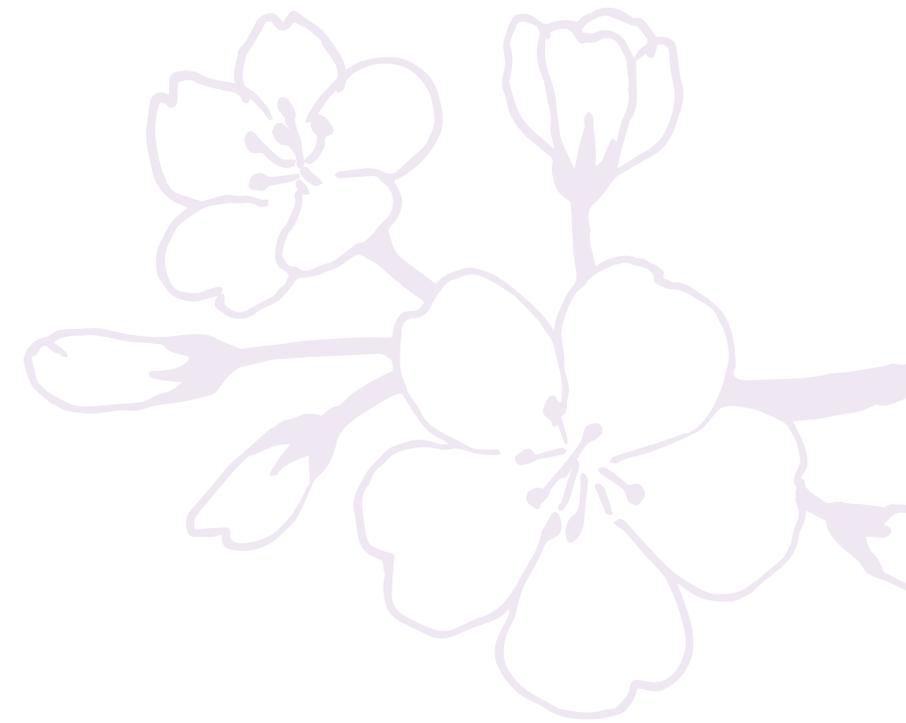
二〇一八年十一月末の東京ミッドタウンの入り口。枯れ葉が舞う高層ビルの前で十名ほどの大学生が輪になって書類を見つ、呪文のようなものを唱えている。宗教系の集まりかと思いきや、そばに行ってみたらびっくり、なんとこちらの研究会の学生たちだった。この日はSFCのORFがある。彼らは「2050年の未来」というプロジェクトで夕方にセッションを開催する。それで寒風の中、昼過ぎからそのプレゼンのリハーサルをやっていたのだ。本番では各自が五分ずつプレゼンをする。リレー討議で資本主義と民主主義の制度疲労や将来展望を語る。会場には百五十人ほどが来るが高校生から経営者までいろいろだ。学生たちは全員にわかりやすく伝えるべく、構成から図表の細部までチームワークで練り上げる。そして、夕方の晴れ舞台。みんな、教室の練習時とは見違えるほど素晴らしいプレゼンテーション、そして質疑応答をする。あたかも蛹が蝶になるのを見るようだ。毎年の赤坂のORFセッションは教師として

のやりがいを感じ、最も感じる時間だった。研究会では旅行にもよく出かけた。橋下徹氏に会いに行った夜には奈良の薬師寺で僧侶チームと会食し、神の存在について語った。茨城では座禅や写経もやった。留学生の案内で中国・深センのフェアウェイ、テンセントや杭州のアリババ本社も訪問した。火鍋を囲んだ思い出が懐かしい。福澤先生は「半学半教」と言われたがまさにその通りだった。学生たちに導かれ、私もたくさん学ぶことを学び、そして一生の思い出を得た。そんな場を提供してくれたSFCにはひたすらの感謝しかない。



ORFでのセッションの様子

●SFCの学生へメッセージ
伝えたい事は三つ。①若いうち
に海外を旅しよう。私は百七十七カ国訪問したが、どこもユニークだ。日本の常識、単純なグローバルスタンダード論では測れない深い文化と社会の歴史がある。同時にきつと日本が、良くも悪くも目に見えない精緻なガラス細工でできた特別な社会だということにも気がつくだろう。②社会に出て毎週、本を読み続ける習慣を保とう。感想をblogやnoteで発信しよう。読書はふつうには会えない人たちの頭の中を涉猟し、知恵をいただき、体験を追体験し、自分自身を常にアップデートする最も効率的な手段だ。SNSよりはるかに密度の高い情報が得られる。マラソンや筋トレと同じく習慣化しよう。③世の中を変えたいというSFC生は多い。NPOや社会運動から始めるのもいいがどこかで大企業や中央官庁に入り込んでみよう。就職、中途採用、出向など時期はいつでもいい。「中枢は中空」といわれる日本の権力構造の実態を体験し、それを知ったうえで（中から動かし、あるいは外から壊して）なかなか変わらない日本を変えてほしい。



連載

贈る言葉

今年3月SFCをご退職される先生方に、これまで長く教鞭を執られてきた中で特に思い出に残っていることやお気に入りの場所、これからのSFCに期待することについて寄稿していただいた。多様な学問領域の中を常に第一線で活躍されてきた先生方の目には、どのようなSFCが映し出されているのだろうか。

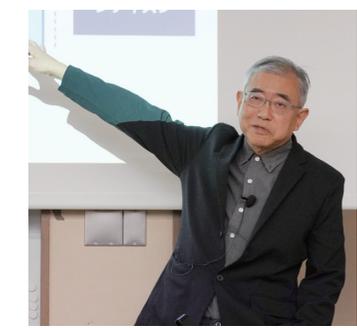
最終講義の様子



1月31日（火）シータ館



1月24日（火）オメガ21教室



1月23日（月）オメガ12教室



藤井進也研究室
x-Music Lab



小林博人研究会

↑ベニヤのトンネルの中に誰がいる……。小林先生のインタビューはSFC REVIEW73号をチェック!!



鳴川肇研究会

↑テンセグリティの球体(写真右)を支えるワイヤーが緩んだ時に簡単に締め直せる。



↑おしゃれな飛沫防止パーテーション。

アラビア文字の語頭形、語中形、語尾形が串刺しに。かわいい♡↓



アラブ文化研究会



在宅看護学分野

→ネオンサインをSFCに出現させたら??

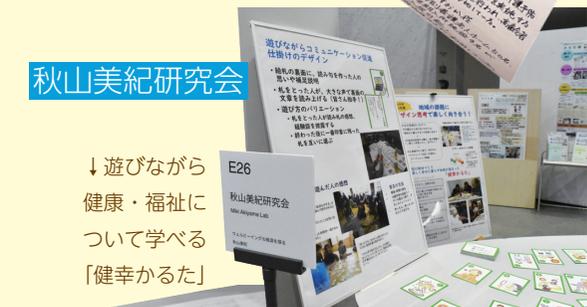
↑在宅看護について、出展者と来場者が議論を交わしていました。



長谷部葉子研究会

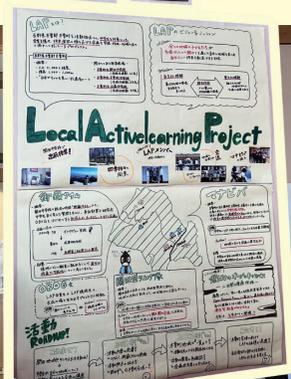
→日が落ちてても話し声が絶えません。

長野県木曾郡木曾町で行われているプロジェクト。「一度行ったらみんな大好きになる町です」↓



秋山美紀研究会

↓遊びながら健康・福祉について学べる「健幸かるた」



SFC Open Research Forum (ORF) が、2022年11月20日、21日にSFCで開催された。SFCが会場となったのは20年ぶり。たくさんの来場者でにぎわっていたORFを一部レポートする。

ORF 取材記



イラスト：松本こころ

共催企画 SFC Creative Week 2022 @ORF

学生主導で企画されたSFCのアーティスト
たちによる制作展。全47作品のうち、
編集員が気になった作品をピックアップ！

全作品の情報を見られる
公式サイトはこちら↓
(<https://sfccw2022.studio.site/>)



↑ [SFCバラエティパック]



SFC TOUCH LAB
さわるたんけんたい公園



↑ [Tomei Highway]



[SCIENCE FICTION CLUB]



↑ 「新しい制服」
生成りで作られている。



[water bowl] ↓

↑ ボウルに入った水に指を
入れるだけで音が鳴った。

[TENSEGRITY WORKS] →



↑ 鳴川研で見た
テンセグリティ
をここでも発見。



壁一面の窓から
やっほー！

↑ 景色を切りとるキャンピングカー



この軽トラキャンピングカー
にじつはSFC REVIEW
73号をチェック！



↑ カレーうどんの踏み
心地が良かったです。

↑ 布を用いて空気の
流れを表現している。

石川初研究室
リエンドプロジェクト



物(代)のフレンジイカ
ちよこと可愛いかもよすね！

← Ω館マグカップ、販売して
ほしいな〜。(編集員 M)

今号の特集で取り上げた研究会の
展示も楽しみました！

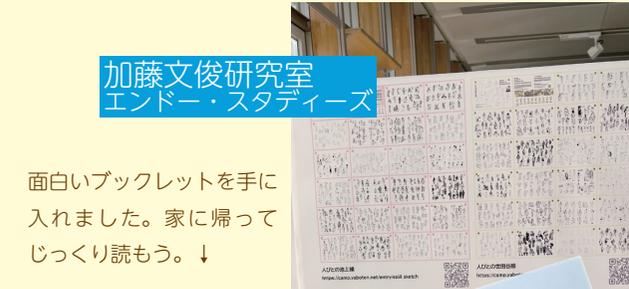


野球ゲームを用いて、目線の動きを測定。↑



加藤貴昭研究会
ヒューマンパフォーマンス

編集員もやって
みました。←



加藤文俊研究室
エンドー・スタディーズ

面白いブックレットを手に
入れました。家に帰って
じっくり読もう。↓



100円ショップを「読む」
"Reading" 100 Yen Shops

2021

ちいさなメディア論

編集後記

KEIO SFC REVIEW 74号をお手に取ってください、誠にありがとうございます。

今号は「動く。動かす。考える。」をテーマに、身体活動と思考のリンクを追究しました。頭と心と体はそれぞれ独立しているものでなく、動きながら考えることも、感じることで動くこともあります。日頃の生活や体験を思い出しながらページをめくっていただけますと幸いです。

連載は、3月にSFCを去られる先生方へご寄稿いただいた「贈る言葉」。最終講義のお写真と共に、温かい思い出や熱いエールをお楽しみください。また、20年ぶりにキャンパスで開催されたOpen Research Forumを編集部員がレポートした「ORF取材記」。独自の視点で記録された写真や言葉は、SFCの多様性を色濃く写し出しています。

そして、74号も取材やご寄稿をお願いした多くの皆様の言葉とお力をお借りし、無事発行に至りました。心より感謝を申し上げます。今後とも、KEIO SFC REVIEWをどうぞよろしく願いいたします。

2023.3.1 編集長 剣持里菜

慶應SFC学会

発行人 秋山 美紀 (会長 / 環境情報学部 教授)

担当幹事 宮代 康文 (総合政策学部 准教授)

事務局 田坂 真美

編集長 剣持 里菜 (環境情報学部 3年)

副編集長 松本 こころ (総合政策学部 1年)

編集委員 青木 陽花 (総合政策学部 3年)

工藤 美桜 (総合政策学部 2年)

荒井 美海 (環境情報学部 1年)

坂井 壮真 (環境情報学部 1年)

深町 優雨 (総合政策学部 1年)

藤田 叶子 (総合政策学部 1年)

表紙 / 特集デザイン 藤田 叶子 (総合政策学部 1年)

発行日 2023年3月21日

発行所 慶應SFC学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322

0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp

無断転載・複製を禁じます。ご相談は慶應SFC学会までお寄せください。